説教20201206テモテ二4:9-22 　讃美歌21-229　384　96

「見捨てられても」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　待降節第２主日を迎えました。この時に、テモテへの手紙２を読み終えることも主のお導きのように思います。この結びの聖書箇所には１７名の兄弟姉妹の名が記され、これまでの箇所とは趣を異にしています。取り立てて記憶すべき聖句たる聖句も見当たらず、ほんの付け足しとして記された箇所のようにも見受けられますが、実はそうではありませんでした。

今日の聖書箇所を有意義に読むには、私たちは、なぜ、ではなくて、どんなふうに、と問い続けながら読むとよいと思います。WhyではなくHowであります。どんなふうに？Howという問いかけは、私たちを、今、ここ、という現場へと導きます。私たちはそれぞれ名前をもっておりますが、今、ここに集められた私たちも、今日の聖書箇所の登場人物１７名と同じように、それぞれ信仰の道を具体的に歩まされているのです。

　概して、私たちはこの聖書をWhy、なぜという観点から読もうとします。例えば、なぜ聖書は私たちに救いに至る知恵を与えるのですか、と問いまして、それは、救いに至る知恵が神からいただく確かな愛の計画だからですよー、などどいった答えを導きます。私たちは概して、このように聖書について、お勉強しようと致します。しかし、それだけでは全く十分ではありません。私たちは、聖書を読んで、そのような因果関係を知るだけでなく、今、ここに居て、働く、生ける神と共に、そして今日の聖書箇所に記される１７名とともに、悩みつつ、喜び祝いながら歩まされる、その姿が、どんな風なものかを知らされ、実際に生きる糧を得ることが出来るでしょう。

　さてパウロは、我が子のように愛したテモテにあてて書いたこの手紙の最後で、見捨てられ体験をしたことを２回も記しています。１０節と１６節です。初めのはデマスという兄弟に見捨てられたこと。そして後のは、みんなに見捨てられたことを記しています。みんなに見捨てられたパウロ、しかし何か、彼は全然絶望していないように見受けられます。

それは、言うまでもなく彼が、主イエス様にこそ救いを求めていたからにほかなりませんが、このみんなに見捨てられたパウロがこの時どんな風であったかを調べていきますと、次のようになります。まずパウロはこの時、年を取り、最晩年を迎えていました。彼は今、牢屋の中に居て、ローマ帝国の裁判所で裁判の当事者となっており、数日後には、その判決によって死刑に処される恐れが大いにありました。この世的に考えれば、パウロは全く

　絶望的な状況に居たのではないでしょうか。事実、この時、パウロがやり取りしていましたこの１７名の兄弟姉妹は、そのパウロのおかれた絶望的な状況を見て、その状況に恐れをなし、その累（るい）が自分に及ばないように、パウロを見捨てて逃げ出したのです。何か福音書に書かれている、イエス様を見捨てて逃げ出す弟子たちの有様を思い起こしますが、パウロは見捨てられても決して絶望はしませんでした。それどころか、パウロはここぞとばかりますます主イエスによって強められ、「主はわたしのそばにいて、力づけてくださいました。そして私は獅子の口から救い出されました」といっています。さらに、パウロは、自分を見捨てた兄弟姉妹を決して恨んだり、もう関係ないやなどど思って逆に見捨てたりはしなかったという事です。それどころかパウロはその兄弟姉妹を思いやって、主の祝福を心から祈っているのです。

　なぜ、パウロは彼の兄弟姉妹たちをこんなにも愛することが出来たのでしょうか。おそらくパウロは、天に召されるその時まで、この愛することをやめなかったことでありましょう。それはパウロの兄弟姉妹に対する愛が、強硬であった、激しかった、頑固であったというのではないと思います。それはパウロが、その愛が完成するときを、キリストが再びやってこられるとき、新しいエルサレムに入れられるときに置いていたからにほかなりません。

　さて、ここてしばし聖書を離れて、今の私たちを規定している、この世的な愛についてその一端を語ってみましょう。先月、秋篠宮のご一家が、家族五人の家族写真を国民に披露されました。みんな一様に笑みを浮かべて、肩を寄せ合い、手を握って、絵にかいたような仲睦まじい家族の姿がそこにはありました。その様子に、若干のわざとらしさを感じた方もおられたかもしれませんが、こういった、皇室の家族写真のお披露目は、第二次世界大戦後の皇室が、今に至るまで続けています一つの伝統であります。昭和の頃には、今のように皇室に対するゴシップ記事はなくて、そのころは、人々は、とても純粋に、皇室の家族写真を見つめ、そこに自分たちが形作るべき家族の、理想形とか模範を見出してきました。昭和の時代には、初めて、民間からの王妃が誕生して、テニスコートで育まれた恋愛が結婚へと至った、そのシンデレラストーリーとともに、愛にあふれたロイヤルファミリーの形成が、人々に純粋な希望と目的を与えたのです。しかし時を経て今の時代に、私たちはそのような絵にかいたような理想の家族の形が、はかなくて壊れやすいものであることを実感させられているのではないでしょうか。

　教会は信仰によって形づくられた神の家族であります。私たちは、一人の父なる神を父とする兄弟姉妹であります。この神の家族は、今までテモテへの手紙２で見てきました通り、多くの試練や苦難を経て、結ばれ形成されていくものです。又、この世の家族もそれに似て、多くの対立や、いさかいや、或るいは、時に応じて見捨てられることなどを経ながら形成され結ばれれて行くのだと思います。

　今日の聖書箇所で、パウロの手紙の筆づかいは最初から激しく、鬼気迫るものがあります。ぜひ、急いで私のところへ来てください。とパウロは記していますが、ここには相手に対する気兼ねなど一切感じられません。私のところに早く来い！とパウロはテモテに要請しています。時代が違いますので安易な比較は禁物ですが、これは決して今でいう命令ではなく、懇願でありましょう。テモテよ何とか私のところへ急いできてくれ、来てくれといってパウロはテモテに懇願しているのです。なぜパウロはこのように相手に対して懇願できるのでしょうか。それは彼のこの願いがダメ元のお願いだからです。パウロは自ら記していますように、数多くの見捨てられ体験をしてきた人でした。人はある意味、人に少しづつ見捨てられながら成長し、やがて一個の独立した者となります。子供は、だんだんと親の保護や束縛を離れて、一個の独立した存在に成長しますが、それは、或る意味、親から見放されていく過程といい変えてもよいでしょう。人から見捨てられた人は、やがてこの世のすべての愛、親子の愛、男女の愛、師弟の愛、などすべての愛を根底で支える、神の愛に気づかされます。そして神の愛に支えられて、たとえこのダメ元のお願いがかなわなかったとしても傷つかないでいられるのです。まだ、神の愛に気づいておられない方は、ぜひ聖書の説く神様の声に耳を傾けてください。主なる神のイエス様は教会でだけでなく、いたるところであなたを見守り、声をかけられておられます。

　神の愛といいますと、何か神聖で、清らかで、ちょっと近づきにくくて、私には縁遠くて関係ないと思い込んでおられる方もいらっしゃるでしょう。確かに神の愛は清いものですが、それはこのパウロの懇願のような形で、私たちに身近なかたちで知らされることもあるでしょう。相手の都合もお構いなしに、急いで私のところへ来てください、なんて随分自分勝手な人だねえーと、場合によっては思わされるかもしれません。しかし私たちはその都度、そこにキリストが働いているかどうかを見極めたいと願います。キリストは霊的に私たち全員にもたらされ、何か全体的な力として働くことも多いのです。例えばクリスマスを待ち望むこのアドベントのシーズンは私たちは一様にキリストの霊的な力に満たされ支配されているのです。

　キリストの愛は、私たちを人間的な愛から或る意味開放して、愛の呪縛から解き放ち、その結果、相手を静かに見つめて、より愛に満ちた行いをすることをも可能にするでしょう。１３節でパウロは、カルボのところへ置いてきた外套を持ってくるようテモテにお願いをしていますが、このように、細かいことに気が付いて、人々を信頼しながらも、ダメもとで願い事をするパウロは、本当にキリストの愛に支えられていたのだなあと思わされます。

　又、１４節からは、パウロはアレくサンドロという銅細工職人を用心せよといっています。彼がパウロをひどく苦しめたと記されていますが、パウロは決して彼を憎んでいたのではありません。ただし、神の愛の報いがその通りもたらされることをパウロは記します。

　神の愛に支えられたパウロのまなざしは、全ての主にある兄弟姉妹へと向けられています。最後に「よろしくお伝えください」と日本語の定型句のように訳されている語のもとの意味は、離れていても共に喜び合おうという意味です。

　ここまで私たちは、神の愛に支えられたパウロの有様が、How,どんな風であっかを見てきましたが、うまくその様子を伝えられたか自信がありません。後は皆様の読み込みや想像にお任せするしかありません、が、

最後にお伝えしておきたいことがあります。それは神の愛というものは、今、ここに生きて働いているという事です。現在進行形の出来事です。それはパウロが如何にテモテを愛したか、いかに愛に満ちた手紙を書き送ったのかという過去の出来事で終わるのではありません。つまり、私は、死んだ神の、過去の出来事の愛を語っているのではないのです。

　前にも申し上げました通り、パウロや、私たち兄弟姉妹の愛が完成するときは、キリストが再びやってこられるとき、新しいエルサレムに入れられるときなのです。私たちは私たちをすべて一つにされる神の愛の完成を、或る家族の仲睦まじい家族写真の中に見出すのではなく、キリストの来臨の時に見出し、その時をひたすら待ち臨んでいるのです。天に召されたパウロは今も私たちと共にその愛の完成を待ち望む兄弟姉妹の一人です。

　パウロは最初の裁判の弁明の時にみんなから見捨てられましたが、決して絶望することはありませんでした。それは私たちの思いを超えてはるかに深い神の愛に支えられたからであります。

　今日の聖書箇所にはよく読めば、毎週礼拝の最後で聞かれる、祝祷「キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりがあなた方一同と共にあるように」の３つの要素、キリストの恵み、神の愛、聖霊のお交わりという３要素が、記されています。

　私たちは、このパウロ手紙をふるい、過去の記録として読むのではなく、今、ここで、私たちを神の家族の一員として呼び集められています、主なる神の声として聴くとき、その有様はますます、私たちの身に迫って、具体的で、喜びに満ちた様相を呈していくのです。

お祈りします

天の父よ、この待降節第二主日に、この兄弟姉妹を

父なる神よ、私たち兄弟姉妹は、苦しみの中に在って、あなたの最愛の独り子の再臨を待ち望んでいます。どうか速やかに、

牢屋の中で、全ての人たちに見捨てられたパウロは、あなたにこそ寄りすがって、救いの恵みへと入れられました。どうか私たちもそのパウロとともに、あなたに救われつつ主の家族となることが出来ますように。

今日ここに集えないでおられる方々やユーチューブで参加されている方々を覚えます。今日の手紙の最後に記されましたように、どうか、私たちが「離れていても喜び合おう」と声を掛け合えることが出来ますよう、私たちを聖霊で満たしてください。

クリスマスの時が近づいてきました。12/20のクリスマス主日礼拝で、説教と聖餐式を担ってくださいます、福岡中部教会の家次恵太郎先生の歩みが豊かに祝福されますように。福岡中部教会をはじめ、日本にある各教会、又世界の教会が一つとなって、あなたをほめたたえることが出来ますように。あなたの光でこの世界を照らしてください。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されて